

教職実践演習（幼）の報告

広島文教大学教育学部教育学科

教授 田 中 崇 教

はじめに

本稿は2022（令和4）年度「教職実践演習（幼）（以下、本科目）」の指導内容を整理すると同時に、15回の指導を省察することによって授業（教授）改善をめざすねらいがある。本科目は、教育学部初等教育専攻幼児教育コースの4年次生（2022年度：56名）を対象に、教員養成・保育士養成課程の履修全体を通じて「教員として必要な資質能力の確実な確認」（文部科学省中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」2006）を目的とした。本科目で設定した資質能力は、この中央教育審議会（2006）に準え、「使命感・責任感・教育的愛情」、「社会性や対人関係能力」「幼児・保護者理解ならびに学級経営」、「保育指導力」とした。毎年度、科目主担当教員（筆者）は「学生の確かな成長を実現するための効率的効果的な指導」に基づく授業内容の構成について、前年度までの省察および当該年度受講生の状況を踏まえながら関係教員等（主として幼児教育コース所属教員）と協議を重ねてきた。

2022年度は、教育学部教育学部教育課程の第一期生が卒業年次にあたるため、いわゆる課程上の完成年度を迎える時期になった。加えて、2021年度から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策（以下、感染対策）に伴い、授業の形式や教授方法に柔軟な対応が引き続き迫られた。こうした教育課程（内容）と教育（教授）方法上における各々の背景が、2022年度の本科目にはあった。そこで、本科目の履修条件にあたる各実習科目、すなわち教育実習Ⅱ（3年次後期開講）、保育実習Ⅰ（3年次前期開講）、保育実習Ⅱ、保育実習Ⅲ（いずれも3年次後期開講）や教育実習Ⅲ（4年次前期開講）と本科目は連携し、幼稚園教諭ならびに保育士養成としての体系的を新たに整えてきた。さらに大学教育ならびに教員・保育士養成を取り巻く社会の状況に鑑みつつ、学生のさらなる成長に資する授業の在り方について改めて検討し指導を行った成果である。

I 授業計画と実施

15回の授業計画は次のように構成し、すべて予定通りに実施した。

- | | |
|-----|---|
| 第1回 | オリエンテーションとこれまでの学びの振り返り、学修計画をたてる 授業日程・内容、教職履修カルテを確認するとともに、学修の見通しをもつ。 |
| 第2回 | 実習を総括的に振り返る—今後の取り組みに関する演習 教育実習ならびに保育実習を総括的に振り返り、専門職保育者として成長・向上してゆくための自己の特徴と課題を確認する。 |
| 第3回 | 幼児教育・保育学研究に関する最新の知見を理解する 研究会（広島文教大学教育学会）に参加し、幼児教育・保育に関する理論研究・実践研究に関する知見を得ると同時に、理論研究者や実践者（幼稚園教諭、保育士、子育て支援者等）との交流を深める。 こうした活動を通して、幼児教育・保育の視点から現代社会にある問題に関心を向ける。 |
| 第4回 | 指導計画案に基づく保育実践を深める①—個人での振り返り ICT機器を積極的に活動しながら、保育実習や教育実習で作成・実践した計画案（指導案）を事例に、保育者（学生）の行為に潜んでいた意図や思いを改めて整理する。 |

- 第5回 指導計画案に基づく保育実践を深める②—グループでの振り返り・討議
ICT機器を積極的に活動しながら、各自で整理した保育者としての行為や意図・思いについてグループで発表しあい、よりよい保育の在り方について検討する。
- 第6回 指導計画に基づく保育実践を深める③—全体討議とグループでの再度の振り返り・討議
ICT機器を積極的に活用しながら、グループで話し合ったことを全体会で発表し、他のグループや参加教員から質問・助言を受ける（全体討議）。その後、再びグループで「受けた質問や助言」について話し合い、深める。
- 第7回 子育て支援（保護者支援）に関するフィールドワークを行う
地域子育て支援の実践現場（すずらんひろば高陽）に赴き、保育実践を行いながら、子育て支援に関する実践的知見を深める。
- 第8回 子育て支援（保育の対象理解としての保護者）の理解を深める
子育て中の母親を招へいし、妊娠出産から育児に至るまでの親としての思いなどを理解するとともに、親（非支援者）の側に寄り添った支援について検討する。
- 第9回 広島県における乳幼児期の教育（子育て支援）施策を理解する—保育・幼児教育の行政理解
広島県教育委員会事務局乳幼児教育支援センターから指導助言者を招へいし、広島県の取り組み「『遊び学び育つひろしまっ子！』推進プラン」のねらいについて理解するとともに、実際の保育・幼児教育現場での事例に基づいた演習（ロールプレイを含む）を行い、保育・幼児教育についての理解をさらに深める。
- 第10回 特別な支援を要する乳幼児（保護者）の支援を理解する
広島県教育委員会事務局乳幼児教育支援センターから指導助言者を招へいし、基本事項を確認するとともに、事例について討議・検討する（ロールプレイを含む）ことによって、専門職保育者としての関わり方（子ども・保護者）についての理解を深める。
- 第11回 実地調査①—保育・幼児教育現場に赴き幼児理解を深める
保育所・幼稚園等（実地）に保育補助者として赴くとともに、これまで行ってきた実地での体験（教育実習、保育実習等）を踏まえ「幼児理解」に関する分析・検討を行う。
- 第12回 実地調査②—園環境・保育業務理解を深める
保育所・幼稚園等（実地）に保育補助者として赴くとともに、これまで行ってきた実地での体験（教育実習、保育実習等）を踏まえ「園環境・保育業務理解」に関する分析・検討を行う。
- 第13回 保育実践の事例分析を通じて保育の対象理解を深める—「幼児の理解」をテーマとして
ICT機器を積極的に活動しながら、専門職保育者の資質として実践上で重視されるテーマについて、これまでの学び（実地調査を含む）を振り返ると同時に討議等を通して幼児の捉え方やかかわり方（声の掛け方）について発展的・総括的に理解する。
- 第14回 保育の内容・方法を深める—「子どもと保育内容（表現）」をテーマとして
ICT機器を積極的に活用しながら、専門職保育者の資質として実践上で重視されるテーマについて、これまでの学びを振り返る（実地調査を含む）と同時に討議等を通して保育内容・方法について、保育内容表現を事例に発展的・総括的に理解する。
- 第15回 保育・幼児教育（子育て支援を含む）をめぐる今後の動向を踏まえながら4年間の学びを総括する
ICT機器を積極的に活用しながら、研究機関や行政・保育現場で取り組まれている現状や課題等を整理し、専門職保育者として保育・子育て支援にどのように向き合うかについて討議・検討する。また、保育・幼児教育を学修した4年間の振り返り、自己の成長・向上、将来への展望ならびに課題について教育学科のディプロマ・ポリシーに準え、検討する。

Ⅱ 2022年度における指導上の特徴

本科目は、2013年度に開講されて以降、段階的に改善の手が加えられてきた。これまでの継続的な取り組みに加え、今年度も授業運営計画立案の際には56名の履修学生がこれまでに取り組んできた教育実習や保育実習等での評価・コメントを手がかりに、補完点と重視すべき方向性として次の点を確認した。それは、実地（幼稚園・保育所等）理解に基づく実践力向上である。そのために、今年度もいくつかの学外機関・資源に協力を依頼した。具体的には、広島県教育委員会事務局学びの変革推進

部乳幼児教育支援センター、実地調査協力園（幼稚園・保育所等）、すずらんひろば高陽、本学卒業生有志である。こうした学外機関・資源の理解と協力を受け、本科目が成立していることは何よりも特徴に他ならない。

2022年度においても授業の各回において内容や指導方法上のアップデートを図った。指導方法上では、実施するにあたって感染対策を十分に行うとともに、実地に赴く際には本学での事前指導およびチェックシートに基づく学生の自己管理を徹底させた。さらに、やむを得ない登学困難学生に対しても、ICT機器を用いた非対面（オンライン）形式での授業参加や自宅で録画視聴に基づく課題への取り組みができるよう策を講じた。このように、やむを得ない事由で学修に遅れが生じないための工夫はICT機器を用いることによって充実させることができた。

さらに2022年度は、「幼児教育・保育学研究に関する最新の知見を理解する」（第3回）と「子育て支援（保育の対象理解としての保護者）の理解を深める」（第8回）について改善の力を入れた。また教育学科の完成年度にあたり、総括的課題を教育学科ディプロマ・ポリシーに準じた形で新たに作成した。その概要は以下に示すとおりである。

1. 教育実習・保育実習での実習園との連携強化に基づく学びの深化—「幼児教育・保育学研究に関する最新の知見を理解する」

本科目は、学外の保育・幼児教育の研究団体主催の研修会への参加や、保育・幼児教育学研究者による講話会を催し、最新の研究に関する知見を得る機会を設けている。2021年度は、広島大学大学院幼年教育施設附属幼稚園研究会にオンラインで受講学生らは参加した。

2022年度から、保育実習や教育実習で実習する協力園での実践研究について学ぶ機会を積極的に設けることとした。実習園・施設での実践研究に触れることによって、受講学生らは実習園・施設の実践理念などを深く理解することができ、また下学年生にとっては近い将来実習を行う可能性のある園での実践を事前に理解しておくことができる。また、実習園・施設側も実習以前に自園・施設を学生らに伝えることができると同時に、本学学生を実習前に理解することができる。このように、実習園・施設側も学生側も両者に利点が期待される。なお、2022年度は社会福祉法人みどり会みどりの森の保育園（保育実習Ⅰ実習園・実地調査園）の主任保育士小林美紗紀氏（幼児教育コース2013年度卒業生）に「乳幼児の育ちや学びを知る—0・1・2歳児の姿から—」をテーマに講話を頂いた。実習園の保育士から園での実践について解説を受けることによって、実習園（様々な園）理解の促進につなげることができた。

2. 授業経験者が子育て・保育職を伝えることの意義—「子育て支援（保育の対象理解としての保護者）の理解を深める」

本科目の特徴として、2016年度から幼児教育コース卒業生をゲスト・スピーカーとして招聘し、自身の子育てや保育職に関するいくつかのテーマについて語る機会を設定している。受講学生にとっては、近未来の自身の姿に近いモデルからの実体験に基づく講話は、例年好評である。2022年度のゲスト・スピーカーは、サムエル子ども未来の園2016年度卒業生であるであった。教職実践演習で卒業生から講話を受けた学生が、初めて登壇する立場になったのである。

在学時の思い出、（卒後の）保育所への入職時の心境および苦労とやりがい、結婚出産・子育てに勤しむ現況と改めての保育職に対する思い等、受講学生に寄り添った講話が繰り広げられた。受講学生の多くは、自分たちと同じ環境を過ごしたことを卒業生の言葉の端々から受け取り、共感できたことを学修記録に記載していた。今後の人生を展望する上で参考になったとのことであった。次年度以降も、授業経験者をゲスト・スピーカーとして招いてゆく予定である。

3. 教育学科ディプロマ・ポリシーに基づく自己分析—保育・幼児教育（子育て支援を含む）をめぐり今後の動向を踏まえながら4年間の学びを総括する

本科目は、授業の第15回目の事後学修課題として自己の成長・向上、将来への展望ならびに課題について検討するためのシートを従来から学生に課してきた。4年間にわたる教育学科での学修を通じ

て、成し得たことや将来への展望と達成のための課題（テーマ）を、改めて教育学科のディプロマ・ポリシーに準えた。

先述の通り、受講学生は本学教育学部教育学科の第一期生であり、教育学部教育学科の3ポリシーに基づいて学修を積み上げてきた。受講学生らが卒業年次を迎えるにあたり、同様に教育学科も設置（2019年度）から完成年度を迎える。旧初等教育学科から教育学科生を対象とした本科目となるにあたり、自己分析（総括的課題）の項目を教育学科ディプロマ・ポリシーに改めた。

Ⅲ 成果と授業改善に向けた課題

以上、2022年度は「教育実習・保育実習での実習園・施設との連携」、「幼児教育コース卒業生と在学生とのつながり」、「教育学科ディプロマ・ポリシーに基づく学生の自己分析」の視点で授業内容の充実に力を入れた。指導方法上では、ICT機器の効果的活用に工夫を講じた。受講学生による課題への取り組み状況や記述内容を確認した際、充実した学びであったことが確認できるため、本科目は今年度も学生の資質向上に一定の役割を担えたといえ、成果とみなすことができる。

本科目がよりよい学修活動になるためには、引き続きあくなき授業改善が必要である。そのためには、関係教員や関係機関との連携に基づく改善体制の構築があげられる。先述のとおり、教育学科は2023年度入学生から新たなカリキュラムで教育活動を行う。新たなカリキュラムと専門職保育者養成との効果的な接合を問題意識に据え、次年度は実習科目の充実と履修学生の就職（活動）との円滑な連携を図ることを取り組みテーマとしてあげたい。

謝辞

本科目を実施してゆくにあたり、多大なるご支援ご尽力を賜った広島県教育委員会事務局乳幼児教育支援センター田島美帆主査、同奥新恵理主査、幼児教育コース卒業生有志、実地調査受け入れ園・施設、常設オープンスペースすずらんひろば高陽等関係各位に謹んでお礼申し上げます。